

法難の一つ、後周の世宗の廃仏である。太祖は即位してまずこの廃仏の後始末をすることを重要な任務とした。それがこの西域求法につながるものであろう。その他いろいろと理由が考えられるがともかく太祖の行かした西域求法がさらにその後のインド僧の陸續とつづく入朝、および仏典の翻譯、そして大藏經の出版につながることは否定できない。しかしその後の問題はここでは一応おいて、まず具体的に西域求法の時期を検討し、宋代仏教の發展に大きな契機をなした点にその意義があることを強調したい。

当派の行道作法

羽塚堅子

「行道作法訣」に云く、「発衆出仕下臈先。総礼伽陀登高衆。直履起座一拝登。衆止焼香匝三礼。経畢万俱燭立替。発衆向棚入華籠。賦華衆止頂漢音。調声童出又調声。把蓮降檀左右立。懷扇後退受華籠。童退堂達三步迎。左繞左座自後從。左右入列散華後。手替中入是隨意。立盤前時左右立。華籠授童置扇登。置蓮頂経撤華籠。本所返師次降檀。還座衆止発若聞。総礼添勤配讀卓。回向撤卓直草鞋。総礼発衆下臈退」。当派の行道作法は古来かくの如し。この作法の本拠如何と尋ねるに、密宗諸法会儀則の中に行道散華作法・堂達所作・座席之様・行道之様等あり。是等を統合するに全く当派の行道法と同じ。茲を以て考うるに先回に於て論じ

たるが如く、当派の行道作法も亦た勸修寺の永愿に依りて相伝したるものならん。往時声明作法の混乱したる砌ならば一応然るべきも、現時の斯道の盛時に於て、真宗として密宗の作法を堅持すべきや否や。

善導大師の法事讃に云く、「奉請既竟。即須行道七遍。又使人將華在西南角。待行人至。即尽行華与行道衆等。即受華竟。不得即散。且待各自標心供養。待行道至仏前。即随意散之。散竟即過。至行華人所。受華亦如前法。乃至七遍亦如是。若行道訖。即各依本座処立。得唱梵声尽即坐」。是れはこれ真宗第五祖光明大師の行道法なり。この前行道法は二段に分る。法前の軌則と正行道となり。軌則は即ち是れ総と細となり。総とは須く行道七遍すべしとなり。細とは行華と行道法となり。一人華をもつて西南の角に立つ。心を標し供養して仏前に散じ。行道訖れば本座に立つ。唱梵の声尽くるを待て即ち坐せよとなり。正行道の中に三段あり。行道は勸衆と讃梵偈と七市竟訖りて立讀五となり。かくの如きの文あり。是れ學者の知れる処、また昔大法会には必ず之を敬修したる処なり。然るに何ぞ是をすて、他宗の法に従はんや。儀式を司るの仁、書を講ずるの學者、以て如何と考えらるるや。

夫れ行道の濫觴を案ずるに、震旦に於ては廬山の慧遠を以て始とするか。その念仏行道の作法は諸書に徴するも明かでない。善導に至りて行道作法の確立を見たというべきか。後善導法照禪師は五会の念仏を創設して行道作法の新軌軸を出されたと考えらるるも、その根本書たる広法事讃に旋繞行道門の章があるべきであると推察するも、関本のため知るに由ない。略法事讃には行道の

事は書いてないが、般舟三昧行道は無論あるべきであると推察せらるる。慈覚大師が長安に至り、法照禪師の遺弟より彼の引声念仏を伝えた引声作法には阿弥陀経を誦し念仏しながら行道をするので、その作法は実に広大なものである。これを縮小して伝えたものが天台の例時作法であり、現在御隣山でも之を依用している。然れば当派の行道法はここに根源があるかと思はれるが、前にも論じた如く、当派の行道法は全く真言密教の作法を依用している。法然聖人の門弟の間では、往生礼讃が全盛を極め、その結果五会念仏の影響を受けて、茲に念仏行道法が出来た。これは法照の広法事の形であるが、実に不思議というべきである。蓮師が念仏行道堂がほしいといわれたのも、この法に私淑されていたのであるまいかと思われる。

以上散漫な議論を述べたが、結論としては善導の行道作法を依用すべきであり、一躍して蓮師の望まれた如く念仏行道法を行すべきであると思う。

江戸時代に於ける往生要集の開版

佐々木求巳

往生要集は日本浄土教流布の上に重要な地位を占めるが、絵入延書本は江戸時代に於ける民衆教化の上に於て特に注意されなければならぬ。

従って、要集の開版は建保四年版以後（記録に於ては、仁安三年版）数多い。徳川期以前のものは、今、暫くおくが、徳川期のものに就いて見るに、日下師の真宗史研究には十三種、（内一は誤）岩波の国書総目録には十八種以上を挙げてゐる。国書総目録は相当に広く網羅しているが、脱しているものも相当にあり、同版異刊記本は整理されていない。小生は自己の調査を整理して、次の如き成果を得る事が出来た。

（○は総目録、×は日下師目録に見える本）

- (1) ○ 慶長初期刊本（鈴木藏木活本）
 - (2) ○ × 寛永八年版（嘉休版）
 - (3) ○ × 寛永十七年版（安田版）
 - (4) ○ 慶安版（御茶水図書館蔵本）
 - (5) ○ 寛文三年版（同上）
 - (6) 寛文十年以前刊本（絵入延書本）
 - (7) ○ × 寛文十一年版（絵入延書本）
 - (8) × 延宝頃刊本（絵入延書本）
- （此の版には、西村版、松会版、無刊記版の三種の異刊記版がある。）

- (9) ○ × 貞享元年版（首書本）
（当版には異通箋本がある）
 - (10) ○ 貞享二年版（竜大蔵本）
 - (11) ○ 貞享三年版（村上勘兵衛刊本）
 - (12) × 元禄二年版（絵入延書、高橋清刊本）
- （日下師は、元禄二年版に二種ありとされるが、一本は誤で